

メディア様の娯楽

メディアが自らの力を振るって生み出した娯楽ルーム。

今日はその部屋に足湯を作っていた。

——そう。ブルーレイクにエリカが作った足湯を参考にしたのだ。それを女神の力を使って、自分の娯楽ルームに生み出した、女神の力の無駄遣いである。

「あら、わたくしのお仕事を世界の管理であり、そのためには監視が必要なんです。ただひたすら世界を見続けているんですから、くつろげる環境は必要ですよ」

地の文にまで反論してみせる。この女神様、本当にやりたい放題である。

「余計なお世話です。世界の管理者が好き放題してなにが悪いんですか……と、出来ましたわね」
メディアは完成した足湯にちゃぷりと足を浸け、世界の監視を再開する。というか、世界の監視は二番モニターで、メインにはアベル達の姿を映して観察する。

だけど——

「ううん。交互に温泉に浸かったり、進展はあるみたいですけど、いまいち刺激に欠けますわね。この調子だと、二股状態であることを気にして、まったく進展しない気がしますわ」

メディアは足湯から上がって、水気を女神の力で払って立ち上がる。更にはその姿を村娘のように変化させ、ブルーレイクへと降臨した。



そして——

「町長さん、わたくしに空き家を一軒売ってくださいませ」
ブルーレイクの町長と交渉を始める。

「……見かけない顔ですが、よそから来なさったのですか？」

「ええ、最近この町が面白くなりそうだと聞いて引越してきたんです」

「ほう、そうでしたか。そういうことなら歓迎いたしますじゃ」

ということ、空き家を購入して家の中と娯楽空間を接続。ブルーレイクでの生活環境を整え、更には建築中の温泉へと足を運んだ。

「こんにちは、エリカさん」

「……えっと、あなたは……どこかで会いましたか？」

「(この姿で) 会ったのは初めてですわ」

女神はしれっと嘘——ではないけど、真実じゃないことを口にする。

「そう。なら気のせいね。あたしになにか用なの？」

「ここには温泉だけじゃなくて、カフェも作ると聞いてきたんですわ」

「あら、良く知ってるわね。でも、店はまだ出来てないわよ？」

「分かってますわ。その店で働かせて欲しくて来たんです」

「……お店で働きたい？ でもあたし、まだどんな店をするか決めてないんですけど」

少し困ったようなエリカの表情を見て、攻めるのならここだとメディアは思った。

「まあ、そうなんですか？ エリカさんは異世界の知識がおりですから、この世界のどこにもないような、珍しいカフェを作ると思っただけですが……」

ちらちらと、エリカに視線を送る。

「……あたしの世界のカフェかあ。ぱつと思いつくにメイドカフェとかがあるんだけど、あたしは細かいルールとか、良く知らないのよね。おさわりは、禁止なんだろうけど……」

「あら、この世界でそれを知っているのはエリカさんだけなんですから、エリカさんが決めたことがルールになるんではありませんか？」

「——なっ!!」

エリカは電撃を浴びたかのように目を見開いた。

そんなエリカを突き動かすべく、メディアは追撃を掛ける。

「さきほどのおさわりで例に挙げましょう。メイドへのおさわりは禁止。ですが、メイドからのおさわりを、客は拒んではならない、とか。あなたが好きに決めれば良いのでは？」

もっと言えば、エリカからの誘惑を、アベルは拒んではならない、とか。それが日本のルールだと言いつつしまえば良いのだと、メディアはエリカに訴えかけた。

そして——

「あなたの言うとおりでわ。アベルを誘惑するためにじゃなかった、この町を発展させるために、日本の文化を持ち込みましょう!」

「はい。ぜひお手伝いさせていただきますい!」

こうして、メディアはしれっとエリカのアドバイス役へと収まった。それを切っ掛けに、据え膳のエリカを食わねばアベルの恥的なエリカルールが浸透していくのだが……

その事実を、このときのアベルはまだ知らない。